



Title	説く、知る、生きる : Mr. Sammler's Planet における知的葛藤の意味
Author(s)	片渕, 悦久
Citation	Osaka Literary Review. 1994, 33, p. 150-163
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25500">https://doi.org/10.18910/25500</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 説く、知る、生きる — *Mr. Sammler's Planet* における知的葛藤の意味 —

片 渕 悦 久

## I

Saul Bellow の作品の特徴のひとつは、物語の発展に中心人物による思索の跡が反映されることである。この特質が最も明確に出るのが *Mr. Sammler's Planet* (1970) であろう (Fuchs 220-23)。なぜなら、この小説では、主人公 Artur Sammler の回想と思索、具体的には中世以来の人間の文化、政治、歴史の変遷、彼自身体験したイギリスでの知的生活と第二次大戦中のユダヤ人大虐殺、さらに現代アメリカ社会における物質主義に冒された人間生活の現状などについての思索が、物語中で起こるその他の出来事を結びつけているからである。この小説に一貫性を持たせるのは、主人公の視点を通して綴られる外的世界それ自体ではなく、彼の意識の変遷である。

ところで物語は最後に、主人公の甥であり、ナチスの脅威から彼を救ってくれた恩人の、親友 Elya Gruner の死に直面する所で終わる。そこで Sammler は、人それぞれに与えられた人生の契約のようなものを「知っている」 (“we know, we know, we know.”) という言葉を発する。この “know” は、物語の最初で触れられ、また繰り返し言及される “explain” と何らかの対照関係にあると考えられる (Pifer 12)。またこの二つの言葉は、小説の始まりと終わりの位置を占めていることから、物語全体にとって重要な概念であるように思われる。本稿では、この二分法の意味を物語の展開と関係づけ、主人公の知的葛藤の跡をたどりながら、この小説のもつ物語世界の特質を明らかにすることを目標とする。

## II

すでに論じ尽くされたことだが、Sammler という名は「収集家」を意味し、彼自らの目で見、心に刻まれる様々な情報が、彼の言葉(外的発言と内的思考)を通す形で物語が成立していることをまず確認しておく必要がある。彼は自分が見たこと、聞いたことを積極的に自ら語ることを躊躇していることにもまた注目すべきである。

70年以上の間、様々な時間と空間の中で自らの歴史を刻んできた Sammler は、物語の現在の時点でニュー・ヨークに住んでいる。特に仕事もせず、甥の Gruner からの生活費で暮らす Sammler は、現状に不満を感じてはいないが、甥が死の床に瀕している今、将来に対する経済的、精神的不安を漠然と感じざるをえない。物語は彼が、頼るべき人物を失って一人になったときの自分対他者の関係を懸念していることを暗示する所から始まる。夜明け方、浅い眠りから覚めた Sammler は、まだ覚めきらない意識の中で次のような思索をする。

The eye closed briefly. A Dutch drudgery, it occurred to Sammler, pumping and pumping to keep a few acres of dry ground. The invading sea being a metaphor for the multiplication of facts and sensations. The earth being an earth of ideas. (4)

Sammler は、現代世界に氾濫する “ideas,” 言い換えれば「事実や大事件の増殖」を促す “explanation” に対して嫌悪感を抱いている。しかし、“Mr. Minutely-Observant Artur Sammler” (12) と言われるように、彼は「分析的な」観察を自らの宿命とした人物である。次の引用に明らかなように、彼は「説く」(“ex-plain”) 過程において、誤りや偏見の入り込む余地を認めている。それは、「説明」の抱える問題を自分のものとしてとらえていることを示している。

But sometimes Mr. Sammler felt that the way he saw things

could not be right. His experiences had been too peculiar, and he feared that he projected peculiarities onto life. Life was probably not blameless, but he often thought that life was not and could not be what he was seeing. And then again, most powerfully, he occasionally felt on the contrary that he was a million times exceeded in strangeness by the phenomena themselves. What oddities! (110)

人間の知覚能力には限界があるのは当然のことで、その意味では全知の“observer,”あるいは“explainer”はありえないという認識に Sammler は到達したように思える。

つまり、“explanation”は決して究極の解釈、あるいは決定的な判断を提示することではない。自らの現実把握をどのように「単純化」(“plain”に)しても、それはひとつの“version”にすぎないのである。またこれと関連して次のような叙述もある。

Arguments! Explanations! thought Sammler. All will explain everything to all, until the next, the new common version is ready. This version, a residue of what people for a century or so say to one another, will be, like the old, a fiction. More elements of reality perhaps will be incorporated in the new version. (19)

つまり、この場合「説くこと」は自論を主観的に語ることにほかならない。言い換えれば、“version”はひとつの“fiction”であり、虚構に基づいて説明を主張することの無意味さが Sammler にはわかっている。さらに以下を参照すると、

Accept and grant that happiness is to do what most other people do. Then you must incarnate what others incarnate. If prejudice, prejudice. If rage, then rage. If sex, then sex. But don't contradict your time. Just don't contradict it, that's all. Unless you happened

to be a Sammler and felt that the place of honor was outside. However, what was achieved by remoteness, by being simply a vestige, a visiting consciousness which happened to reside in a West Side bedroom, did not entitle one to the outside honors. (73)

われわれは、個々の“version”が対立を生むだけであるということが Sammler の言わんとすることであることがわかる。つまり物語における彼と説明家と称される人物たち — Margotte, Angela, Wallace, Shula, Feffer, および Dr. Lal — との議論は、個々の感覚に基づく一方的主張の対立の構図を具体的に示していると言える。しかし、なぜ Sammler はこれほどまでに“explanation”に対して懐疑的な態度をとるのか。それは、ある意味で彼こそ「説明」が人類の歴史に知的遺産と裏腹に悲劇的な運命をもたらした経緯を身をもって体験した人物だからである。彼が恐れるのは、「説くこと」が特定の“version”を強制する、つまり必然的に権力の行使につながる可能性をもつからである。これがナチスのイデオロギーがもたらした一連の悲劇と結びつく。説くことが思想的な自己主張だとすれば、ナチスは民族レベルでの圧倒的な思想統制にほかならない。つまり、Sammler は、説くことのはらむ両極端を経験的に認識している。このような両価感情を背負う限り、彼は他者の説明に対して率直な気持ちになれない。このため彼は決して“to insist”しないこと、あるいは“to be disinterested” (236) であることに徹する姿勢を見せるのである。

しかし一方で、彼がどれほど説明家たちから距離を置こうとしても、彼らの方から説明を要請されてしまう。

Wait a minute, though: Sammler denied himself the privilege of the high-principled intellectual who must always be applying the purest standards and thumping the rest of his species on the head. (75)

Sammler は自ら“explainer”であることを否定しながら、知性と経験ゆえ

に他者から説明家の代表のごとく扱われるのである。ここに彼の知的葛藤の出発点となる問題がある。この点に関して、例えば小説の第2章の後半部に次のような一節がある。

Mr. Sammler had a symbolic character. He, personally, was a symbol. His friends and family had made him a judge and a priest. And of what was he a symbol? He didn't even know. Was it because he had survived? He hadn't even done that, since so much of the earlier person had disappeared. It wasn't surviving, it was only lasting. (91)

Sammler は自分の象徴的役割に気がついている。彼はそれが何かわからないが、その数奇な人生経験ゆえに “judge,” “priest” と見なされる運命にある。そのため、たとえ望まずとも、彼はひっきりなしに誰かの訪問を受け、議論を持ちかけられる。“But there was always someone arriving, knocking at the door” (55-56).

しかし Sammler は議論の相手になるつもりはない。“In any case, he was not going to be one of those kindly European uncles with whom the Margottes of this world could have daylong high-level discussions” (20). なぜなら、彼は人間の判断の正当性は個人、あるいは集団の主張の度合と関係していると考えからである。“You had to be a crank to insist on being right. Being right was largely a matter of explanations”(3), と Sammler は思索する。そして以下のような記述が続く。

Intellectual man had become an explaining creature. Fathers to children, wives to husbands, lecturers to listeners, experts to laymen, colleagues to colleagues, doctors to patients, man to his own soul, explained. The roots of this, the causes of the other, the source of events, the history, the structure, the reasons why. For the most part, in one ear out the other. The soul wanted what it wanted. It had its own natural knowledge. It sat unhappily on

superstructures of explanation, poor bird, not knowing which way to fly. (3-4)

ここで Sammler が感じているように、現代は知的活動の意味の正当性が疑問に付される時代である。また関連して次のような箇所もある。

The many impressions and experiences of life seemed no longer to occur each in its own proper space, in sequence, each with its recognizable religious or aesthetic importance, but human beings suffered the humiliations of inconsequences, of confused styles, of a long life containing several separate lives. In fact the whole experience of mankind was now covering each separate life in its flood. (26)

Sammler によれば、現代社会においては普遍的真理の追求から個人的欲求の充足へと人間の視点の方向性が移行している。そして個人的欲求の充足のために、人は「説明」を手段として用いるのである。先に触れた “explaining creature” たちは一取り留めもないことにも議論せずにはいられない Margotte も、男性関係に無頓着な Angela も、金と道楽に時間を浪費する Wallace も、父の仕事のためには盗みも躊躇しない Shula も一 Sammler には異質に映る。この点からもわかるように、*Mr. Sammler's Planet* では、「説明家」と常識をわきまえた主人公との対比が顕著なように思われる。しかし次の叙述には注意すべきである。“Alert to the peril and disgrace of explanations, he was himself no mean explainer” (19). Sammler は自分は “explainer” ではないと言う。しかし、単なる “mean” な「説明家」ではないという限定の仕方は、ある意味で、彼自身もまたそのひとりであることを証明していることにもなりはしないか。この小説がおもしろいのは、彼らに投影される説明癖による自己弁護の姿に嫌悪を感じているはずの主人公が、拒絶のためとは言え、度々彼らとの議論に取り込まれてしまうという皮肉な展開があるからである。

自説を主張することは、自らもまた “explaining creature” の一人となることを意味する。主張すればするほど、自らが忌避する存在へと近づくのである。Sammler は、もちろんこの矛盾に気がついている。物語の出来事のひとつとなる、主人公の娘 Shula が父のためにと無断で持ち出した論文の著者である Dr. Lal との対話の中で、Sammler は次のように言う。“Explanation? I have an objection to extended explanation. There are too many. This makes the mental life of mankind ungovernable” (212). このような認識がある以上、彼は説明に対して全面的にはコミットできない。しかし一旦語りだすと、Sammler は Dr. Lal をして、“And how clearly you put things. You are a first-rate condenser.” (214) と言わしめるほどである。この点からも、Sammler が説明に対して持つ両価感情が推測される。Sammler は、自ら “explainer” となることを執拗に拒みながら、同時にまた何らかの形でそうならざるをえない。なぜなら、このような状況下で生き延びるには、何らかの形で自己を正当化、すなわち「説く」必要があるからである。以下では、説くことをめぐる二重拘束状態におかれた主人公を、物語はどのように描き出すのかを考察することにする。

### III

この小説における Sammler の思索は Dr. Lal との議論を通して物語に顕在化する。この場面では、「公平無私」という Sammler 自身の特質への言及に引き続き、哲学のおよび科学的議論を戦わせることの無意味さを、彼が次の一節で締めくくろうとする。戦争中は神など信じることはできなかったと言う Sammler は、以下のように続ける。

But inability to explain is no ground for disbelief. Not as long as the sense of God persists. I could wish that it did not persist. The contradictions are so painful. No concern for justice? Nothing of pity? Is God only the gossip of the living? Then we watch



these living speed like birds over the surface of a water, and one will dive or plunge but not come up again and never be seen any more. And in our turn we will never be seen again, once gone through the surface. But then we have no proof that there is no depth under the surface. We cannot even say that our knowledge of death is shallow. There is no knowledge. There is longing, suffering, mourning. These come from need, affection, and love—the needs of the living creature, because it is a living creature. (236)

Sammler は “knowledge” に言及している。ここでの「知」は、純粹な想像力から遠ざかった、現世的な領域における、すなわち “explaining creature” の駆使する概念的、説明的な知識を指し示している。これは Sammler 自身が最初に言う、魂が求める “natural knowledge” とは異質なものである。

Sammler が求める「生来の知」とは、科学的真理、法、歴史といった知性の問題ではなく、生きるために必要な叡知 (“the needs of the living creature”) のようなものである。彼は、「説明」では決してつかみきれないものが、実はそれと表裏一体の関係で存在することに気がついている。

Humankind watched and described itself in the very turns of its own destiny. Itself the subject, living or drowning in night, itself the object, seen surviving or succumbing, and feeling in itself the fits of strength and the lapses of paralysis — mankind's own passion simultaneously being mankind's great spectacle, a thing of deep and strange participation, on all levels, from melodrama and mere noise down into the deepest layers of the soul and into the subtlest silences, where undiscovered knowledge is. This sort of experience, in Mr. Sammler's judgement, might bring to some people fascinating opportunities for the mind and the soul, but a man would have to be unusually intelligent to begin with, and in addition unusually nimble and discerning. He didn't even think

that he himself qualified by his own standard. (73-74)

彼の言う「説明」に不足しているのは、単純化によっては計り知れない、魂の深奥にある純粋な「知」であると Sammler は感じとっている。その探求のため、あえて彼は “a depth man rather than a height man” (183) であろうとする。

Sammler は説くことに対する二重意識の先に、何か超越的な光明を模索しているように思える。例えば、説明家の一人 Wallace との会話の中で、Sammler は『戦争と平和』のある挿話（ピエールがフランス軍将軍と精神的交感を果し、命を救われるという一節）に言及して次のように言う。

“It is a thing worth praying for. And it is based on something. It's not an arbitrary idea. It's based on the belief that there is the same truth in the heart of every human being, or a splash of God's own spirit, and that this is the richest thing we share in common. And up to a point I would agree. But though it's not an arbitrary idea, I wouldn't count on it” (189)

人間同士の精神的つながりこそ Sammler の希求してやまないものである。しかし、彼は自らホロコーストで妻を失い、自らも死に瀕し、一度はポーランド人に助けられ生還するが、次には別のポーランド人に命を狙われる羽目に陥り、また自らもドイツ兵を射殺する経験をしたのである。そのため彼には人間同士の心のつながりなど、“very booklike” (189) な理想としか思えない面もあるのである。

Sammler が探求するこのような領域に到達するには、トルストイの小説の人物たちの場合がそうであったように、精神的交感のできる相手が必要となる。その人物こそが、なみいる説明家たちとは一線を画す Gruner なのである。このことを踏まえたうえで、前述の Sammler と Lal との議論の場面に戻ると更に興味深い解釈が引き出される。Lal に促される形で、Sammler は自分の考え方をすすんで述べる気持ちになる。“I am extremely

skeptical of explanations, rationalistic practices. I dislike the modern religion of empty categories, and people who make the motions of knowledge" (226). ここで言う「知」は、決して "explanation" に結びつく物事の知的理解のことではない。それはより根源的な直観的知覚に基づくものである。これこそが、"The soul wanted what it wanted. It had its own natural knowledge." であるはずだ。

Sammler は、彼とは正反対の科学的理論を駆使して、しかしながら彼と同様に人類の生存への道を説こうとする Lal との対話によって初めて、「知る」べきものが何なのかを明らかにし始める。

"Well, maybe man should get rid of himself. Of course. If he can. But also he has something in him which he feels it important to continue. Something that deserves to go on. It is something that has to go on, and we all know it. The spirit feels cheated, outraged, defiled, corrupted, fragmented, injured. Still it knows what it knows, and the knowledge cannot be gotten rid of. The spirit knows that its growth is the real aim of existence. So it seems to me." (235-36)

Sammler は「何か」としか言わない。それ以上表現すれば、「説明」になるからだ。しかし、物語は単純には展開しない。というのも、彼が「知」の本質を明らかにする前に、Wallace の「説」に基づく父親の Gruner の隠し金の搜索、その最中の水道管の破裂、家屋の浸水により、Lal と Sammler の議論は中断させられるからである。

たしかに、Sammler は理論的枠組だけの説明家であろうとはしていない。しかし果して「説くこと」から「知ること」へ心境が変われば、物事にすべて解決がつくのだろうか。ここまで見てきたように、Sammler は生きている限り、何らかの形で説明家たちと関わり合わなければならない。このことは第5章の終わりで、議論が中断した後、彼ら (Margotte, Wallace,あるいは Lal) と一夜をひとつ屋根の下で過ごすことになった Sammler の次

のような述懐に窺い知ることができる。

Feeling what a strange species he belonged to, which had organized its planet to such an extent. Of this mass of ingenious creatures, about half had gone into the state of sleep, in pillows, sheeted, wrapped, quilted, muffled. The waking, like a crew, worked the world's machines, and all went up and down and round about with calculations accurate to the billionth of a degree, the skins of engines removed, replaced, million-mile trajectories laid out. By these geniuses, the waking. The sleeping, brutes, fantasists, dreaming. Then they woke, and the other half went to bed.

And that is how this brilliant human race runs this wheeling globe.

He joined the other sleepers for a while. (254)

この地球に生きる限り、Sammler は他者と様々な形で関わりをもたなければならないことをここで認識している。厭世家になったところで、世間との関係を完全に断ち切ることは、(月へでも行かない限り) 不可能なのである。

しかしその一方で、Sammler は同時に「説明家」たちとの奇妙な一体感も得る。“They all had such fun! Wallace, Feffer, Eisen, Bruch, too, and Angela. They laughed so much. Dear bretheren, let us all be human together. Let us all be in the great fun fair, and do this droll mortality with one another. Be entertainers of your near and dear” (294). このような Sammler の心境の変化が、説明家を生み出す社会と和解し、消極的ながらその一員となることに同意した意志表明である、という解釈を引き出すとみてもよいだろう。だがこの一見消極的、諦念的な和解の仕方を一方的、否定的にとらえるべきではない。なぜなら、Sammler のつかむ価値観は(真理とは言えないまでも)、説くことが権威の道具として(ホロコーストがそうであったように)使われない限りは、現代の「説明家」たちも、その発言や行為において自らの在り方を自らが選び取る自由をもってしかるべきであり、またその意味において、最終的には彼らを容認してもよいので

はないか、と 彼が「判断」したとも言えるからである。

しかしそれならば、小説の最後で、息を引き取った Gruner と対面する Sammler の悲痛で絶望的な “we know” の叫びには、何が暗示されているのだろうか。病院の地下の薄暗い霊安室での Sammler の様子をテキストは次のように描写し、物語を締めくくる。

Sammler in a mental whisper said, “Well, Elya. Well, well, Elya.” And then in the same way he said, “Remember, God, the soul of Elya Gruner, who, as willingly as possible and as well as he was able, and even to an intolerable point, and even in suffocation and even as death was coming was eager, even childishly perhaps (may I be forgiven for this), even with a certain servility, to do what was required of him. At his best this man was much kinder than at my very best I have ever been or could ever be. He was aware that he must meet, and he did meet — through all the confusion and degraded clowning of this life through which we are speeding — he did meet the terms of his contract. The terms which, in his inmost heart, each man knows. As I know mine. As all know. For that is the truth of it — that we all know, God, that we know, that we know, we know, we know.” (313)

人が生まれながらに与えられる「契約」に沿うことが、自分に対しても、また社会に対しても最も誠実な生き方だということを、ようやくこの場面で Sammler は悟ったように見える。同時に彼はそれぞれの人間に与えられた契約に気がつきながらも、それを敢えて口にも、態度にも出さなかった Gruner に感銘を受けるのである。

しかし生き残った Sammler は、Gruner と同じ生き方をすればそれでよいというわけではない。人にはそれぞれの「契約」があり、彼自身の「契約」は、実は説くこと、すなわち自分の得たヴィジョンを他者に伝えることではないか。実際彼は小説全体を通して、幾度となく説いてきたはずである。彼

にとって真に意味のある人生を送るには、少なくとも人生に積極的に参加し、説くことが必要なのである。そうでなければ、彼は混沌とした現代世界を生き延びることはできないと、この小説は暗示するのである。

#### IV

以上のように、Sammler の知的葛藤は、「説くこと」と「知ること」に対する両価感情から生じていると言える。しかしこの葛藤は、最初に見たように、理性から直観へと思考の様式を単純に変えるだけで解決することのない、より根源的な問題、人間の生存の条件と深く関係している。Sammler は、「判断」せず、公平無私、あるいは無関心な態度で、世俗から隔離して生きようと表面的には努めてきた。しかし、結末部における彼の心境の変化は、むしろ人生の現実を直視し、またそれを説き、かつそこから生きることの意味を知ることが彼の宿命であり、またそうしてしか、生きる実感を味わえないことの認識への彼の到達を如実に物語っている。彼は生の意味を知ることにより、死もまた意味を帯びることにも気づいたのである。このような一連の「判断」は、あくまで形而上学的な、精神的な領域での解決にしかないかもしれない。しかしこのような精神的領域での救いの問題と、精神的な自己回復への期待と希望は、Sammler のみならず、おそらく Bellow 小説の主人公たちが繰り返し変奏してきた主題にほかならない。

*Mr. Sammler's Planet* は、「説くこと」と「知ること」の対立を解消に導くのではなく、両者を統一することの困難さを、理性と直観、あるいは科学と哲学の知的領域と現実問題としての統合の困難さ、またその過程の複雑さを描き出している。主人公の葛藤の軌跡は、たとえそれがこっけいな行為であろうと、思索することの可能性への信頼を物語る。彼が思索を断念しないのは、思索の継続こそ（つまり彼にとってはそれがそのまま「生きること」を意味する）、彼にとって「説くこと」の意味を知ることであり、また「知ること」の意味を説くことにつながるからである。この小説の物語は、その

ような可能性を暗示する形で閉じられる。Sammler は説くことと知ることを、現実的な生きるという局面において統合する契機をつかむのである。

### 参考文献

- Bellow, Saul. *Mr. Sammler's Planet*. New York: Viking, 1970.
- Fuchs, Daniel. *Saul Bellow: Vision and Revision*. Durham: Duke UP, 1984.
- Pifer, Ellen. *Saul Bellow: Against the Grain*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1990.